



(遊戯「家鳩」之図。お茶の水付属幼稚園の幼児達。向って右側は、豊田英雄先生で、手前は近藤はま先生らしく、洋装の婦人は、松野クララ夫人であらう。)

家

鳩

唱歌「家鳩」を

千葉成田幼稚園に学ぶ

中村道子

今を去る八十年の昔(明治九年)、東京お茶の水女子師範学校付属幼稚園が開設せられ、愈々

豊田英雄先生が、日本的に、優美に詠み替えられた歌であって、それに雅楽調の曲がつけてあります。当時これを歌い乍ら、遊戯をして遊んだのでしよう。

本格的に幼児教育の施設が我国育の施設が我が国

此の家鳩の遊戯の図が、現在愛珠幼稚園の資料倉庫にありますから、此の曲と遊戯の動作を知りたく、古文献の中をよく索しましたが、どうしても見当りませんでした。尤も「唱歌」と題する和本装釘の書が数冊ありまして、それに、雅楽の音名がつけてありますが、肝腎の「家鳩」の歌には、惜しくも一行抜けて居りますため、どうしても物になりませぬ。私は其の絵を眺めては、残念に思つて居りました。

に創られた時、幼稚園唱歌として「家鳩」のうたが生れました。
此の唱歌は、当時唯一の保育書であった「幼稚園」の訳者桑田親五先生が、鳩舎(はとごや)の詩を直訳され、それを、

或る時、大阪市立都島工業学校長の太竹照真先生と、汎愛高等学校長水津征一先生が来園せられ、本園の古文献を御覧

になりました時、私はこの絵の説明と共に、曲の不詳を嘆きました。大竹先生は、「それなれば、成田幼稚園の山口政子先生に尋ねて御覧、今八十二歳の高齢であります、四十二年間も同園の園長をし、音楽にも堪能であつたから、知つて居られるかも知れません。」と申されましたので、次の上京の節には、同園を訪問しようと決心し、此の機会を待つて居りました。丁度昭和二十九年十二月十三日に幼稚園施設協議会の理事会が開かれ、幼稚園補助金の予算計上の陳情もあつて、二三日上京する機会を得ましたから、此の機逸すべからずと、張切つて上京し、一切の要務を果して、十二月十五日に成田幼稚園へ参りました。

予め大友園長様にお願ひして居りましたから、詳しく来意を告げました時、

「ああそれは残念です。山口先生はお年がお年ですし、病気をせられてから、もう全然記憶はなく、当園も来年は創立五十周年を迎えますから、園史を作りたいと思つて、昔の事を尋ねますが、よくわからないので、残念に思つて居りますが、山口先生の面倒を見て上げて下さつて居る方で、先生が園長時代の主任保母だつた若命さんが居られますから、私は何でもこの方に尋ねて居ります。山口先生に早くいきいておけば良かったと、惜しい事をしたと思つて居ります。もう若命さんも此処へ来られるでしょう。お呼びしてありますから…

：真実に良い方で、こんな方は一寸珍しいと思ひます。良いお家の方で生活も結構なのですが、山口先生が一人ぼっちでお気の毒だと云つて、東京から一寸来て、其の儘になつてしまつたのです。」と申されている時に、「御免下さいまし、」と云つて先生が這入つて来られました。大変元氣相な方でありまして、それから三人は、成田幼稚園の事や、昔の保育について話合いました。其の時家鳩の歌と、遊戯について尋ねましたが、「其の歌はあつたように思ひますが、良くおぼえて居りません。唱歌は、山口先生が、ピアノがお上手でしたから、おまかせしてしまつて、私達は歌に合せて遊戯をしました。その頃の遊戯は、唱歌に動作を振付けて、いろいろ創作を致しました。…折角遠方から御越しになりましたのに、私が知らないで、申訳ありませんね。山口先生だったら知つて居られるでしょうに…。」と、真実に気の毒そうな顔を向けられたが、實際私は失望してしまいました。

遙々成田迄来て、何も得る所がなかつたのか、明治初年の歌の一つが、保育史から失われてしまふのか、愛珠の家鳩の額には、遂に、「曲も遊戯も不詳」と説明するの…と思つた時、これは私にとって堪えられない悲しい事でありました。先生は私を慰めるように、「昔の事について調べていらつしやると伺ひましたから、此の中に何かお役に立つものがあるかも知れないと思つて、持つて参りました。せめてこれ

でもお役に立てば……」と、渡された緑の本は、お茶の水保育科卒業生の同窓会誌創刊号でありました。その中には、氏原銀先生の文で、初期の付属幼稚園の状態や、保育草分け時代の苦勞の有様が書いてありまして、大変参考になりましたから、この記事を写本する間、拜借することとして、失望の中にお暇することにしました。しかし、何と申しても残念でなりませんから、たとえ御病氣とはいえ、若しお許しがあるなれば、此の幼稚園を、これ程に育てられた過去の御苦勞に敬意を表し、どうしても御目にかかつて、御挨拶をさせていただきますと思ひました。

「剛情なようですが、若しお差支なければ、山口先生に御挨拶だけさせて頂けませんでしょうか、折角此処迄参りましたものですから——」と、両先生にお願いしましたら、若命先生は、

「では一寸お待ち下さい、先生に申して見ますから。」とて、園内にある旧園長の舎宅に帰られました。暫くして、「何卒」との事に、失望の中にも喜びを感じ、若命先生の御案内で、桜の老木を前にして、掃除の行届いたきれいな家の入口迄来ました。

「さうと硝子戸を開けられましたから、寒くてはいけなないと大急ぎで玄関に這入らせて頂いて、吃驚しました。」

其処には、黒の緞子の被布を召した山口先生が、端然と坐

つていられたから——。一見明治維新の志士の母を見るような感じで、静かな中に毅然としたおかし難い精力を、其の底に持って居られるような方でした。

初対面の挨拶が終りました時、親し気に、

「貴女は何をお尋ねになりたいの。」と、問われましたから、半ば諦めて、「家鳩」の曲と遊戯を知りたい事を申しました。

「それだったら私も行けばよかったです。」

「先生覚えていらっしやいますか？」

「忘れていたかも知れないが……覚えていた所もあるでしょう。」と申されました。私は嬉しさが込み上げて来ました。はらはらと涙さえ流れて来ました。

然し、もう帰らねばならぬ時間でした。これは又如何しよう……今になって……

「今日教えていただきたいと思ひましたが、もう時間がなくて、帰らねばなりませんから、残念ですが帰ります。それなれば、来月もう一度東京へ来ますから、その時に、又よせて頂いて、その節に教えて戴きましょう。何卒お願い致します。それ迄、先生、頑張つて想い出して下さいませね、お願いします。」

「ええ……ええ……想い出します。想い出しますよ」と、きれいな声ではっきり返事を下さいました。

「まあ良かった、こんな嬉しい事はありません、何卒お願い

します」と、私は涙と共に先生の両手をとって、何度も押し戴くようにして、強く云いました。失望の中から、希望の光を見出した喜び、涙なくして居られましょか、私は臆面もなくハンカチを眼にあてて、流れでる涙をぬぐいました。

側の大友先生や若命先生は、聞えるのか知らと不思議に云い合って、聞えるのねと申されますと、うなづいて居られました。

思いがけない訪問者に驚かされて、病気を起されはしないかと案じつつ、無事を祈り乍ら、且つ、先生が家鳩の曲を想い出して下さるように祈念しつつ、足元も軽く帰途につきました。それから、京成電車の中でも、宿に帰ってからも、東海道の車中においても、思い出しては、「行ってよかった。御挨拶して良かった。」と、繰返し繰返し思いました。

年を越えて昭和三十年一月中旬、再び全国施設協議会の役員会が開かれましたから、私も上京し、関係用務を果すと直ぐ、成田幼稚園を訪いました。

昭和三十年一月十九日は、さすがに大寒のことにて、庭前の芝生に霜柱が立っていました、さくさくと踏み乍ら、冬芽の沢山ついている桜の下を通り、山口先生のお宅の玄関をあけて、声をかけますと、若命先生が待っていましたとばかりに出て来られました。そして奥の方に向って、私の来た事を山口先生に知らせると共に、「先生は朝から中村さんはまだか

まだかと云って、とても待っていましたよ」さあ早くお上りになって、お寒かったでしょう、おこたにお這入りになって、さあさあと、心からなる歓迎のお言葉に、私は先づ安心して、山口先生が、其の後御無事であった事を察しました。

奥からも、「よく来られましたね」と、すき透るようなきれいな声が聞こえ、私におこたを進めて下さいました。挨拶がすみまして、私も遠慮なく炬燵に入れて戴きました。

「先生、今日こそは、家鳩の歌を教えて下さいませね、今日は覚える迄、長く居らせていたいても、良うございますか」と、云ってお顔を見ますと、晴やかに笑い乍ら、「貴女泊ってお帰りにならない？ ね!! そうなさればいいのに、こんな家だけど……。」と云って、心から若命先生と共に勧めて下さいました。

私は勤めのあること、三学期は特に忙しい事、上京する機会が、又ある事等申して、家鳩を教えて貰う事にしました。

「先生、家鳩の歌を想い出して下さいましたか、」

「ええ、想い出しましたが、一度、歌を皆云ってみて下さい。」と、云われましたから、

「家鳩の、菓の戸開きて放ちやる……。」と、少し大きい声で云いますと、「家鳩の、家鳩の……菓の戸開きて放ちやる……。」と、少し節をつけて口ずさみ乍ら、

「その次は？」

あそぶらん あそびてあらは
かえらなん とくかえらなん
かえらずば すのととじてん
すのととじてん

「行えやいすこ、」
「行えやいすこ……」
「山に野に、芝生の原に遊ぶらん。」
「ゆくえやいすこ……山に野に、」
「それから？」
「芝生の原に、」
「そうそう芝生の原に……」

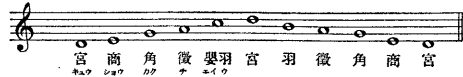
「遊ぶらん。」
「遊ぶらん……行えやいすこ……山に野に、」
「芝生の原に、」
「芝生の原に……遊ぶらん……」 「それから？」
「遊びてあそば、帰らん、」
「遊びてあそば、あそびてあそば……あそば……かえらなん、とく帰らん。」

「次は何、とく帰らん？ とくかえらん……」
「かえらずば、」
「かえらずば……」
「巢の戸閉じてん、」
「巢の戸閉じてん、巢の戸とじてん、」
「それを二回繰り返して、巢の戸閉じてん……」私が歌の全体を又繰り返すと、じっと聞いて居られました。大友先生が、中村さんの声は聞えるのかしらと申されますと、「ええ聞えますよ、」と云って耳を指し乍ら微笑されました。じゃあ、勝手髯ね、と云って皆が笑いますと、頷き乍ら、「うるさいからね、」と、今度は私の顔を見て、お笑いになりました。

家 鳩

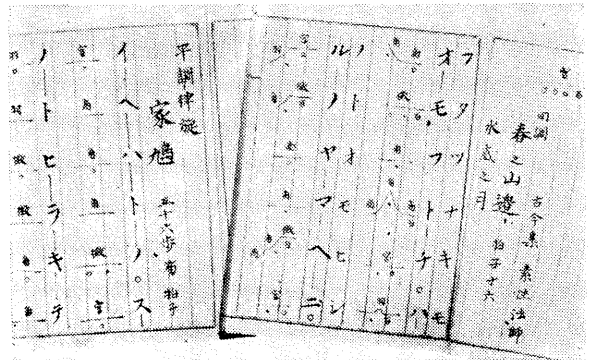
探譜 中村道子
伴奏 山中二郎

旋 律 調 平



「先生歌って下さいな、私が音をとりますから、」と云って、手帳に略譜で書きましたが、中々聞きとり難くて、書いては消し、消しては書き加え、紙面が大変よごれました。私は非常な音痴だと悲しく思いました。先生はそれに眼をやっ
て、何度も繰り返し返して下さいました。見ていて下さると思っ
て居りましたが、実は全然見えないのだそうです。私は先生
の声を聞き乍ら、今書いた譜を見て、自分も声を出しました

が、間違うと、「のうのう!! 私の手を見て、手を見て、」と云って、自分はピアノを弾いている気持で机を叩いて居られ
ました。「分りましたか。」「分りました。」「では歌って御覧。」
と云われて、歌いましたが、あちこち助けて貰って、やっと
歌えました。私は少し不安でありましたが、これ以上先生に
歌って貰うことは、先生を疲れさせる、若し病気になるら
れは、申しわけないと思って、「おかげさまでよくわかりまし



上は「家鳩」の曲。山口政子先生によって分明了曲譜
下は明治初年の学校幼稚園唱歌集

た。有難うございました。」と云いますと、

「中村さん、今、分ったと思つても、貴女が大坂へ帰れば、又分らなくなりますよ、まだ分つていない所があるのですもの。」

「でも先生がお疲れになつてはいけませんから、これでよしませう。」

「疲れやしませんよ、それよりもおぼえなきやあ——」

「先生大丈夫ですか、家鳩で病気になるかと、若命先生に怨まれますもの。」

「大丈夫ですよ。」

「それなら、このおすしを戴いて、お腹をこしらえてから、大いに教えて頂きましょう。」

「そうそう!!それがいいわ、一度休んでからにしましょう。」

「そうなされば良いわ……つまらないですが、さ召上つて……山口先生も一度お休みになって……それからになされば……」

「若命先生は慈母のふところの暖さを思わせるような柔い声で、静かにねぎらわれました。おすしを戴き乍ら、山口先生の様子を見ていましたが、別にお疲れの様子がありませんので、そうなれば、愈々本腰を入れて習いませうと、晴々とした気持になりました。」

食事中、若命先生が云われるのに、山口先生は、成田幼稚園がピアノを買つてからは、お氣が向けば、夜中でも弾かれ

たそうで、幸い山全体が幼稚園であるから、どこからも苦情が出なかつた事や、上野の音楽学校のピアノ専科を卒業せられた事を話されました。この時山口先生は、笑い乍ら、お茶の水を卒業して東京の江東幼稚園に奉職せられた事、幼稚園の先生はどうしても音楽がよく出来ない駄目だと悟つた事、奉職し乍ら学校へ行くのだから、時々始業に遅れる事があつたが、そんな時には上野の墓の間をかきわけるように近道して、走つて行つた事、其の頃の先生はとても厳しくて、手の甲に懐中時計を乗せて五指練習をさせられた事等を思い出して、「でも私はほんとに一生懸命でしたよ」と、面白そうに、若やいだ声で話されました。楽しい食事が終ると、

「さあ!!先生お願いします。私が歌いますから、聞いて頂戴ね。」唱っていると、先生も一緒になって歌い乍ら、私が間違つと、ピアノを弾いているように机を叩いて、一人で歌つて下さつた。「もう私は歌わない。貴女一人でおやりなさい」と云われて、暫く私は一生懸命に歌つた。だんだん声が大きくなつた。

大分自信がついた時、今のは七十点、もう一度」と云われて又歌う。「のうのう!!それは斯う」と、一緒に歌つて下さつた。やつと歌えるようになった時、賞めて下さいました。二人で合唱したり、聞いて貰つたりして、漸く家鳩を覚えしました。「中村さん、もう覚えましてよ、これなら大坂へ

お帰りになっても大丈夫よ。」と云って戴いた時、私は真実に嬉しいでした。旋律を覚える事に夢中になっていたから、遊戯を聞く時間もなくて、唯メロディーだけを頭にきざみこんで帰ることにしました。帰り際に、若命先生は、「山口先生は一生懸命になると、あの通りにて、貴女様に向っても、のうのうとか、七十点だなんて仰しやって、何卒お気を悪くしないで下さいませよ。」と、お詫びになり、却って私が恐縮してしまいました。先生を休ませもせず、後で病気を起されはしないかと、稽古が済んでから気が付いて、申しわけなかった事でありました。大友園長様も、山口先生の今日の元氣は、近來なかった事と今更のように驚かれました。

一山全部が幼稚園にて、遊園には桜の老樹が、七十余株もあるそうですが、もとは百株以上あって、これは皆、山口先生が園長時代に植えられたものだそうです。私は桜の満開の時を想像し、心も軽く、二人の老先生の健康を祈りつつお暇しました。

この時から、私が家鳩を口ずさまない時はなく、やっと帰阪致しますと直ぐ、山中二郎先生(東京音楽学校卒業) (大阪市立文化会館長)に連絡をとって御來園を乞い、古献「唱歌」の音名と、照し合せ乍ら、五線の上に、点々と、楽譜を列べて貰いました。やがてこれに伴奏もつき、私の唱歌に合せてオルガンを弾いて下さいましたが、実に感慨無量なものであります。そして私は

もう家鳩の歌から放念されました。

家鳩は永久に、大空高く翔けて、成田の山と愛珠の園を、飛び交う事でありましょう。

ほろほろと鳴く家鳩は、今日は成田へ明日は愛珠へ!! 其の後、遊戯も、唱歌 適用実験遊戯と云う、京都市の村上書店から発行された書にて知ることが出来ました。

(大阪・愛珠幼稚園長)

倉橋記念文庫御協力の御芳名

かねてより、私共相ばかり倉橋記念文庫の計画を企て御協力をお願いいたしましたところ幸い皆様方の御讃同を頂き、多分の御拠金を賜りましてまことに有難く存じました。つきましては、第二回の発表、昭和三十一年一月二十七日以後、昭和三十一年四月十日現在までの御芳名を左に掲載させていただきます。 (発表は到着順 敬称略)

昭和三十一年四月十日

倉橋記念文庫係り	及川ふみ・津守真・山村きよ
二〇〇〇円	西村 正俊
一〇〇〇	芦刈トキ子
一〇〇〇	戸田 信子
一〇〇〇	吉川 保美
五〇〇〇	三浦かづよ
	三〇〇〇円
	花井 孝
	二〇〇〇
	松井 栄一
	三、〇〇〇
	牛島 義友
	一、〇〇〇
	白田 梅
	以上会計
	三三六、一七〇